

鎌倉中期の京・鎌倉の漢籍伝授とその媒介者

福島金治

金沢文庫本との周辺

Introduction of Chinese Texts into Kyoto and Kamakura in the Mid-Kamakura Period and Key Players in the Process :
A Study Centered on the Kanazawa Bunko Collection and Other Manuscripts

FUKUSHIMA Kaneharu

はじめに

- ①北条実時の漢籍受容と九条家関係者
- ②実時の和漢書集積と幕府内助縁者
- ③『論語集解』の地方への伝授と鎌倉おわりに

【語文翻訳】

本稿は、鎌倉中期における漢籍の京都から鎌倉への移入、御家人への伝授と相互書きによる本の累積、そして地方への拡散のありかたを将軍家や御家人の人的ネットワークとその所領関係から考察したものである。考察の対象は、金沢文庫本の核をなす北条実時本とこれに関わった清原教隆の伝授本を中心とした。

まず、北条実時らに伝授した清原教隆について、九条家の家司の側面が見いだせることが清原良元宛て書状の分析を通して指摘した。教隆の鎌倉下向は九条家との縁が背景にある。実時本にみえる豊原奉重にも九条家との関係が推測される。やがて、将軍家の家政に関わる人物は、鎌倉の要人への漢籍等の伝授を媒介に、幕府内での立場も確保していく。こうした伝授が進行した結果、鎌倉では同一本が複数の家に所有される状況が生まれ、御家人を協力者として書きする関係がうまれていく。実時の協力者をみると、後藤基政は京都大番役で上洛、太田康有は公務の上下関係、二階堂氏とは俗縁関係といったことを背景に補写や本の提供を行つた。こうして、要人の家

では蔵書を文庫で管理し、儒者が継続的に教授し、伝授された者同士がそれぞれの本を相互に校閲する環境が整つた。

漢籍の鎌倉からの地方伝播は、清原教隆が伝授した『論語集解』を通して検討した。嘉曆鈔本は加賀白山八幡院玉藏坊での書き本で、奥書にみえる得橋禪門への伝授は鎌倉で行われたと考えられる。得橋氏は加賀国得橋郷の惣地頭とみられ、六波羅料所の管理人的立場にあつたと推定される。得橋氏への伝授には六波羅探題北方北条時茂、執權北条長時らとの関係がある。また、虎闘師鍊書き本の伝授をみると実相寺・菅生など足利氏・吉良氏の寺院や所領がみられる。漢籍の伝授には一族と所領のネットワークが媒介となっていたと考えられる。書籍の伝授は所領經營のあり方をも反映しているのである。

【キーワード】漢籍、金沢文庫本、北条実時、清原教隆、足利氏